博士論文要旨

# いけばな：花をいけ切る

柳川太希

現代においていけばなと呼ばれるジャンルは、花を花器に挿して鑑賞する営為である、と一般的には理解されているだろう。また、いけばな以外にも花道（華道）とも呼ばれて芸道の一つに数え上げられることもある。このいけばなは、語に即せば「はな」を「いける」行為とその所産とを意味する。「はな」は一般に切り花と言われる枝ないし茎を付けたまま切り取った素材を指す。その中でも花が代表的な部位ではあるが、実際は他に葉、茎、枝なども含意する。また、「いける」は「生ける」ないし「活ける」の字が当てられ、制作者であるいけ手の一定の人為性が前提とされている。先行研究はこの切り花を花器に挿す場面に集中して議論しているが、本論文はいけばなの営為の射程を前後に拡張しようとする。

本論文は、生活文化としての現代いけばな――外での稽古や花展ではなく自宅での、宴席などの催しではなく日常における現代いけばな――を主題とし、このいけばなの全体構造――野や庭にある植物を切ってきて、切り花を花器に挿し、手入れをし、そして花器から抜くという全体構造――を、個々の点ではなく、線で結んで明らかにすることを目的とする。この目的を達成するべく、本論文は一人称的観点から経験を記述する現象学的方法――実践者としての経験に基づき、いける行為の内実に結果からではなく過程から迫る方法――を採用する。

第１章では、西谷啓治のいけばな論を主題とし、野や庭にある植物を切ってきて、切り花を花器に挿すところまでを議論の対象とした。西谷におけるいけばなとは、いけ手と切り花とが相互作用によって、いけ手の体認と切り花の自己実現とを深化させていき、双方がふれ合いながら切り花の美を幾重にも高めていくことで一つになる営為である。この第１章で扱わなかった部分を次章以降に引き継いだ。

まず、いけばなには稽古が付きもので、稽古は守破離という階梯において論じられる。この稽古に焦点を当てつつ、いけ手と切り花が一つになる、という第１章の結論が私以外の実践者の言説からも同様に言えるのかを検証しなければならないため、第２章で井上治、西平直を経由しながら勅使河原蒼風のいけばな論を解釈することで、より具体的な次元から、どのような過程でいけ手と切り花が一つになるのか、という問いの解決を目指した。いけ手は、まず切り花の言葉を素直に聞くことで、自らの欲と身を濾過し、自らをゼロポイントに至らしめる。次

にいけ手のその時その場の感情が切り花に乗り、最後に道ないし場の全体エネルギーが顕れ出ることで離の境地に現成し、いけ手と切り花が一つになる。

次に小括では、以上の２つの章の議論を組み合わせて統一した結論を導くことで、現代のいけ手にとっての稽古の目的を明らかにした。すなわち、いけ手は己を忘（わす）ることで切り花と和（わ）する。そしていけ手と切り花が一つになる。現代のいけ手の稽古の目的は、型を身に付け、その型を忠実に再現することに留まるのではなく、型を経由した自由な創作によって、切り花の真の姿を追求することである。

今度は視点を切り花そのものに移した。というのも、西谷はさかりの状態の切り花を想定し、切り花の変化を念頭に置いていなかったが、実際には条件が整えば、切り花は蕾の状態であればそこから花を咲かす可能性があるからである。こうした切り花を花器に挿した後の推移をいけ手の手入れによって捉えるべく、切り花の生を第３章で扱った。その結果、いけばなにおける切り花の生とは、自生していたときと異なり、死に向かって生存するようになった自らの生を、いけ手との協同作業を通じて実現する生である、という結論を得た。

第３章では、切り花の生の推移を、「枯れる」という充実した老衰を実現するように方向づけるところまで明らかにしたが、第４章では「枯れる」状態の先にある切り花の死に迫った。第４章では、どのようにいけ手は切り花を花器から抜くのか、という問いに対して、いけ手は、切り花が有する美の最後の形態を確保するべく、切り花にさわりながら死を受け入れたとき、切り花の代謝が停止して腐敗する前に切り花を花器から抜く、という結論に至った。そして、いけ手は野や庭にある植物にさわりながら切り、切り花にふれながら花器に挿し、手入れによってふれ合いを積み上げ、そして切り花にさわりながら花器から抜く、という一連の行為を線で捉えることができるようになった。

そして、第５章では、第１章の西谷解釈において留保した箇所に取り組み、西谷の議論においていけ手が切り花を花器から抜く行為がどのような意味を持つのか、という問いの解決を目指した。その結果、いけ手が切り花を花器から抜く行為とは、切り花とのふれ合い関係の断絶を体認して諦める決意・決断をすることで、切り花の死をそのものとして受け取ることを、切実さをもって切り花の内側に入り込むことによって徹底するとき、切り花の実在にふれながら切り花の生と美を明らめる最後の協同作業によって切り花をいけ切ることである、という結論に達した。

以上の議論を線で結んでいこう。いけ手はまず、型が身に付いていない状態から型の身に付いた状態を目指す。ここでは、我意を捨てて型を守る技の稽古が求められる。次に、技を習得し特定の型を身に付けたら、この型の再現性を保ちながら日頃より自らの欲と身を濾過する心の稽古を積んでいく。これは本番でも同じ道筋を辿らなければならないため、稽古であれ本番であれ、常にいけ手に求められる。

こうした技の稽古と心の稽古を積んでいることを前提に、実際に切り花をいけていく。それがすなわち、いけ手が己を忘ることで切り花と和することの実践である。ここまでは、自宅での日常のいけばなだけではなく、自宅外での稽古のいけばなや花展のいけばなにも当てはまる。

こうしていけ手が切り花を花器に挿した後も、自宅での日常におけるいけばなだといけ手と切り花との関係が日をまたいで継続する（ことがある）ため、両者が同じ時間と空間を共有し

ながら、いけ手が切り花の枝、茎、ないし葉にふれて、切り花の潜在的な力を感じ取りつつ切り花の新たな可能性を探っていき、いけ手の構想と切り花の本性とが一致した状態を積み上げていく手入れを行なう。

しかし、こうした切り花の「枯れる」を目指す中で、やがて切り花は力動性を失っていく。そこで、切り花とのふれ合いの断絶を切り花にさわりながら体認することで諦めたいけ手は、切り花の生と美を明らめる最後の協同作業としてのふれ合いによって切り花をいけ切る。

このように、いけばなの全体構造とは、いけ手が、第一に野や庭にある植物を切ってきて、第二にその切ってきた植物、すなわち切り花を花器に挿し、第三に切り花の新たな展開に即して手入れをし、そして第四にその切り花を花器から抜くところまで、切り花をいけ切ることである。いけ手は、野や庭にある植物であれ、花屋等で入手する切り花であれ、特定のこの（切り）花を選ぶ。死が明確になることで生きることのできるこの（切り）花がいき切るように、いけ手は最後までいけ切る。すなわち、花をいけ切るのがいけばななのである。